

ポーと漱石：「怪しき鴉」の訳者はだれか

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	45
号	1
ページ	56-70
発行年	1998-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/6116

ポーと漱石

——「怪しき鴉」の訳者はだれか。

宮 永 孝

夏目漱石は、学生時代をおもいおこし、「ほとんど勉強という勉強をせずに通したほうである」と述べている。が、このことばをそのまま素直にうけとるわけにはゆかない。

かれは少年のころから青年期にかけて、相当の数の和漢書および洋書をよんでおり、後年、みずから「いったい、私は何種なんしゅの書物でも、読むということは好きであるから」と述べているからである。

漱石と外国文学、とくにポー（一八〇九〜四九、アメリカの詩人・批判家・短篇小説家）とのかかわりについて論じようとすると、かれはポーのどのような作品を読み、どのていどポーのことを識っていたのであろうか。またポーから何か学ぶ点があったのであろうか。

漱石はわりと早い時期にポーの存在を知ったとおもわれる。二、三年しか在籍しなかった東京府第一中学校では、『ナショナル・リーダー』の二巻（ポーは入っていない）までしかやらなかったから、まだこの時期ポーのことは知らなかったであろう。

はじめ英語の学習そのものにあまり興味をおぼえなかった漱石は、成立学舎（神田駿河台鈴木町）に通学した約一

年間に、発心し英語の勉強を熱心に行うようになっていた。

かれはスウィントンの『万国史』(Outlines of the World History, 1873)を教わるにおよんで、ますます英語の勉強に熱中してゆくようになる。ひょっとして漱石はこの教科書と併行して『スウィントンの第五読本』(Swinton's Fifth Reader, 1883)(ポ－の「大がらす」が収録されている)を習っていなかったであろうか。

明治十六年に出了この刊本は、当時ひろく全国の学校で教材として用いられていたからである。

漱石が大学予備門に入學したのは、明治十七(一八八四)年だが、ここで「大がらす」が収めてあるアンダーウッドの教科書を教わりはしなかったであろうか。

明治二十年代初頭に、饗庭篁村の一連のポ－の翻案小説(「黒猫」「ルーモルグの人殺し」「めがね」などが『読売新聞』に連載され、ついで明治二十九年には、森田思軒訳で「秘密書類」「間一髪」などが、雑誌『名家談叢』や『太陽』に掲載されているから、漱石はこれらをあわせて読んでいたかもしれない。

ともあれ漱石は、明治二十九年十月までのあいだにポ－を知り、その作品のいくつかを読んでいた。同年秋、かれは熊本第五高等学校で英語の教鞭をとっていたが、同校の機関誌『龍南会雑誌』に「人生」と題して一文を寄せ、そのなかで夢想家ポ－にふれている。⁽¹⁾

自ら知るの明あるもの寡^{すく}なしとは世間にて云ふ事なり、われは人間に自知の明なき事を断言せんとす、之を「ポ－」に砂く、曰く、功名眼前にあり、人に何ぞ直ちに自己の胸臆^{きょうおく}を叙して思ひのまゝを言はざる、

去れど人ありて思の儘^{まま}を書かんとして筆を執れば、筆忽ち秃^{たふ}し、紙を展ぶれば紙忽ち縮む、芳声嘉言^{ほうせいけあき}(よい評判と名声——引用者)の手に唾^だして得らるべきを知らながら、何人も躊躇^{ちゅうちよ}して果たさざるは是が為なりと、人豈^{いかで}自ら知らざらんや、「ポ－」の言を反覆熟読すれば、思半^{おもひなか}ばに過ぎん、蓋^{けだ}し人は夢を見るものなり、思ひも寄らぬ夢を見るものなり(後略)。

これは漢文調のやや難解な文章である。

このなかで漱石は、ポーの異常な狂気や白日夢の世界を、ホーソンやコールリッジといっしょに論じるのだが、いまひいた文章だけでも、ポーの名が二度出てくる。

「ポーの言を反覆熟読すれば」とは、ポーのどのようなことを指し、またそれはどこに出てくるのか。

また漱石は、先の引用文を書くにあたって、ポーのどのような版本を用いたのであろうか。

「漱石山房蔵書目録」にみられるポーの文献は、わずかにつぎの二冊だけである。

Poe (E. A.) *Poems of Edgar Allan Poe, With a Biographical Sketch by N. H. Dole* London : G. Routledge & Sons, 1897.

Poe (E. A.) *Tales of Mystery and Imagination* London: Routledge & Sons. (New Universal Library)

漱石の蔵書はいま、東北大学附属図書館に収蔵されている。それはすべて貴重図書あつかいになっており、見るにはあらかじめ許可をえておく必要がある。

が、かれの師フォン・ケーベル収蔵のものは、手続さえふめば、すぐに閲読できる。

漱石が所持していたポー文献は、先きにも述べたように、二冊のみである。いずれも本の状態はよく、つかれは見られない。かれは二冊すべてを通読したものでどうか定かではないが、興味をひいた作品だけをひろい読みした程度ではなかったかとおもわれる。

N・H・ドール編の『ポー詩集』や『神秘と想像力の物語』にしても日本橋の丸善で購入したものであることは、本の扉のうらに張ってあるシールによってあきらかである。『ポー詩集』の扉のうらに、「Natsume, 1897」と青インク（変色し、黒インクのようにもみえる）で書き込まれていることから考えると、漱石がこの版本を丸善で求めた

のは明治三十年ということになる。

さんねんながら『ポー詩集』のほうにはなんら書き込みはみられなかったが、『神秘と想像力の物語』のほうには、若干、黒インクで引いた線が二本とエンピツによる線（子供のいたずら書きのようにもおもえる）が何箇所かみられた。

短編「リジニア」が収録されている三〇頁に、つぎのような横線と縦線（欄外の余白にあるもの）がみられる。

In beauty of face no maiden ever equalled her. It was the radiance of an opium dream – an airy and spirit-lifting vision more wildly divine than the fantasies which hovered about the slumbering souls of the daughters of Delos. Yet her features were not of that regular mould which we have been falsely taught to worship in the classical labors of the heathen.

さらに「黄金虫」が収録されている八〇頁と「ヴァルドマール氏の病症の真相」が収められている三五〇頁にも、それぞれエンピツによる線が何本か引いてあった。

漱石がポーを知るきっかけとなったものは、明らかでないが、院生の時分にじっさい講義のなかでポーの名を耳にはさんだようである。

かれにあらためてポーの存在をおしえ、その人と芸術について説いた講話者は、お雇い外国人のラファエル・フォン・ケーベル（一八四八―一九二三）であった。

ケーベルは、ロシア人、スウェーデン人、ドイツ人の三つの血がまざったドイツの哲学者であり、明治二十六年六月に東京帝国大学の招聘に応じて来日し、大正三年十月まで、東大で哲学概論・西洋哲学史・特殊講義・古典語などをおしえた。

かれは単に哲学や古典語について造けいが深かっただけではなく、大陸の目ぼしい文学にも通じた、人格のすぐれた、りっぱな教師だった。

とくにドイツ文学では、ロマン派のテイク、ノヴァリス、ホフマンの作品などを好んだ。哲学の講義のなかで、ときに余談的に文学作品にふれた。が、漱石がホフマンやポーの名を聞いたのは、ケーベルからである。

漱石は明治二十六年に大学院に進んでいる。この年は、ちょうどケーベルが来日した年でもある。

漱石の「ケーベル先生」という随想のなかに、師が東大の附属図書館の書庫のなかで、「ポー全集」を引きおろすのを目撃した、というくだりがある。

先生は昔し鳥を飼^{かか}って居られた。何処^{どこ}から来たか分らないのを飼^{かか}って放し飼にしたのである。先生と鳥とは妙な因縁に聞える。此の二つを頭の中で結び付けると一種の気持が起る。

先生が大学の図書館で書架の中からポーの全集を引き卸^{はず}したのを見たのは昔の事である。先生はポーとホフマンも好きなのだと云ふ。

この文章が書かれたのは、明治四十四年七月のことである。

ケーベルがポーの全集を手にとったのは、漱石がまた院生であったときのことである。漱石が「ポー全集」といっているものは、厳密に言えば全集ではなく、選集なのである。

東京帝国大学附属図書館が明治十三（一八八〇）年に購求した、J・H・イングラム編『ポー全集』(*The Complete Works. Memoir by J.H. Ingram. Edinburgh 1874-75. 8 vo. 4 vols. pp. (xxii, 2176)*)を指してゐる。この版本は、ポーのいはんの普及本であり、じっさいよく読まれたようだ。

ケーベルが、ポーの作品に親しむようになったのはいつごろのことか、その時期まではわからない。おそらく来日

前にすでに目ぼしいものを読んでいたのであるうし、来日後もじっさい原書や仏訳で読んでいた。

漱石が五高の『龍南会雑誌』に発表した小品「人生」を書くときに利用したポーの版本は、先にひいた二冊ではなかったようだ。『ポー詩集』のほうは一八九七（明治三十）年に刊行されているから、まだ手にとって利用できなかったし、『神秘と想像力の物語』（刊行年不詳）にしても、参考にできなかったであろう。「人生」が発表されたのは、明治二十九（一八九六）年十月であり、『ポー詩集』が出る一年前のことだからである。

おそらく漱石は、勤務先の五高の図書館が収蔵するポー文献を用いて、「人生」を書いたものであろう。そしてその後、先のポーの二書を丸善を通じて外国から取りよせたとおもわれる。

明治四十年九月、漱石は本間久四郎『名著新訳』（秀英社）につきのような序文をよせている。

序

余のポーに関する知識は極めて乏しい。取り立てゝ人の前に述べべき程の材料も意見も有って居らぬのは勿論である。たゞかつて彼の作物を読んだ時の感じが漠然と今も残っている。何でも非常な想像家の様な心持がする。

しかも其想像は人情や性格に関する想像ではないと思ふ。事件の構造に対する想像だと思ふ。さうして其事件がありふれた日常見聞の区域を脱して驚くべく愕くべき別世界の消息であると思ふ。

愕くべき別世界と云つても有名なレヴ、ソ、の詩にあらはれた様な内面的に玄秘の韻を帯びて居るのではない。大体はもっと程度の低い外面的の不思議で好奇心を釣っている。

だから極端に其弊所（よくないところ）を云ふと荒唐不稽（でたらめ）に陥り易い。然しそれを飽く迄も、明晰に、緻密にあらるときは殆んど科学的とも云ひ得べき程の模写を以て叙述して居る。そこにかれの想像の豊贍（ほうぜき）（ゆたか）な所と繊細な所があらはれている。

普通の人ならばとても思ひつけない、思ひついてもかう詳しくは書けない、所を彼は此等の憫くべき空想譚に対して、恰も眼前に展開する活動写真を凝視して筆記する様な態度で書き卸している。

ポーは又短篇作家として有名な男である。今でも短編を論ずるときにポーの引合に出ぬ場合は殆んどない。

此点から見てポーは、所謂三卷小説の例を打破した独創的作家と云つても好い。従つて其作物は歴史的価値がある。長短に關して小説の比較研究をしやうと思ふものは、是非一度はポーを通じて来なければならぬ(後略)。

〔傍点および()内は、引用者〕

ついで明治四十二年一月、かれは『英語青年』(第八号)に、「ポーの想像」と題する談話筆記を発表している。

これは本間久四郎の『名著新訳』に寄せた序文を、すこしふくらませたものである。

ポーは構成の想像力において、異常な才能をしめし、超自然界や人間の域を超えた世界を読者にみせた、とのべたあと、ポーとスウィフトとの手法上の比較をこころみている。

ポーの想像

夏目漱石

去年の九月、本間という人の「名著新訳」に序文を送った。それに書いて置いた事、それ以上に僕の智識は無い。僅の文句の復習(おさらへ)でもするより外はない。

以前にP.G.の作物を読んだ時の感じが僅かに残っているばかりで、格別研究しやうともしなかった。で、其の漠然とたる感じと云ふのは、先づ何でも非常な想像家であつた。

しかも其の想像たるや人情或は性格に關する想像ではない。云はゞ事件構造の想像、即ち constructive imagination である。而かも其の事件は、日常聞睹(睹聞)——みたり聞いたりすること()の区域を脱した supernatural もしくは superhuman な憫く

べき別世界の消息である。

此の憫くべき別世界と云ふのは、彼の詩の、“The Raven”に歌ってあるやうな、内面的の幽玄深秘で無い極く外面的な、主として読者の好奇心を釣って行くと云った風の、悪く云へば荒唐不稽な嘘話を作るに在る。

併し嘘の想像評と云っても、一種の scientific process を踏んだ想像でそれを精密に不明晰に模写している。こんな風の、とても常人の思ひ附く事も出来ないやうな想像の働き……之に付ては後に附をしませう（後略）。

〔傍点および（）内は、引用者〕

これを発表した二年後の明治四十四年夏、漱石は友人の安倍能成とともに恩師ケーベル宅をおとずれた。

このとき三人は、ようやまの話をするのだが、文学談義となり、ポーとホフマンが話題になったようだ。漱石はケーベルがいったことばを「日記」（七・一〇付）に記している。

○ブラウニングは嫌だ。ウォヅウォースの哲学の詩は全く厭だ。ポーは好だ。ホフマンは猶好だ、新らしいのはあまり好かない。アンドレーフは厭だ。チェホフは非常に立派な文体だ。

漱石はまた「ケーベル先生」と題する追想記のなかでも、師の宅を訪問したときの模様を描いている。が、ケーベルの別れぎわのことばは、ポーの詩句であった。

京都の深田教授が先生の家にいる頃、何時でも閑な時に晚餐を食べに来いと云はれてから、行かずに経過した月日を数へるともう四年になる。

漸く其約を果して安倍君と一所に大きな暗い夜の中に出た時、余は先生は是から先、もう何年位日本に居る積だらうと考へた。さうして一度日本を離れ、もう帰らないと云はれた時、先生の引用した「No more, never more」と云ふポーの句を思ひ出した。

漱石がおもいだしたという never more の反復語は、ポーの「大がらす」のなかで、十一回もくり返されるリフレインである。

熊本大学附属図書館に、五高時代の文献がおさめられている。わたしは先年の秋、同所において『龍南会雑誌』のバックナンバー（明治29・4―36・1）を見る機会にめぐまれた。

漱石はラフカディオ・ハーンが熊本を去った翌々年明治二十九（一八九六）年四月十四日の発令で五高の講師となり、同年七月九日教授となった。さらに明治三十三（一九〇〇）年五月十二日付をもって英国留学を命じられ、同三十六（一九〇三）年一月二十一日帰国し、この年の三月三十一日五高を退官した。

漱石が熊本でじっさい暮らしたのは四年三カ月にすぎず、この間に何度か『龍南会雑誌』に投稿している。

ところでわたしが注意を惹かれたのは、『龍南会雑誌』（第八四号、明治34・3・22）の「文苑」に、「怪しき鴉」（「大がらす」のこと）と題するポーの訳詩がのっていたことである。

訳者名はなく、ただ「かげぼうし」とある。いったいこの「かげぼうし」のペンネームを用いた人物はだれだったのだろうか。「怪しき鴉」は完訳ではなく抄訳である。やや長くはなるが、全文をつぎにかかげてみよう。

怪しき鴉

"Respite-respite and nepenthe, from

the memorie of Lenore,

Quoth, O, quoth Kind nepenthe, and

forget this Lost Lenore.....Poe

かげぼうし

掻き曇りたる冬の夜半、独り古き書ども掻き居たりしが、われにもあらず眠氣さして、兎角うつむき勝ちとなり志時、窓の戸叩く音、ほとくと聞えけり。

吉丁子（よい香木）結びたる灯は、大方消えかゝりて、怪しき影をうすぐらき床の上にうつせり。われは、只明け行く空のみ待たれつゝ、亡きレノアの事堪へがたく暮しければ、兎角志て切なき心まぎらさんとせしが、美しかりし昔しの姿ありありと胸中に描き出され苦しき胸は、さながら掻き乱さるゝやうに覚えぬ。

掛け廻せる柴の韓（とばり）、かさくと風なきに鳴りいづれば、ぞっとする計り懷みを感じ、わが胸はいつしか、恐怖の念に満されぬ「人の来り志にや」と呟きながら、開きし窓より常夜の闇を覗きこみつゝ、暫しは「恐れ」と「疑ひ」との二つにとりまかれて佇めり。ヒッソリとせる夜の幕は、いぶかしきまで物暗く、夜なゝ楡の小枝に輝く、明星の影さへ見えず、只消え方近き燈火の折々闇に瞬けるのみ。

われは苦しき思にたへかねて、徴かにレノア!! と囁きしに、怪志き反響は又、レノア!! 囁きかへせり。

煮えかへるやうなる胸を懷きつゝ、わが部屋に返らんとせし時、一人高き音は再び、ほとくと響きわたれり。われはこのいぶかしき音詮議せんとて、窓蓋さつと押しあげ志に、古く色黒き大鴉の二度三度、羽ばたきしつゝ、わが部屋の中に飛び来りつゝ、暫しはあわたしく翔けめぐりしが、果てはバラスの半身像に止りぬ。此は正志く、聖おほかりし世より永らへ志、昔しながらの古き鴉なるべし。

われはこのいかめしく、色黒き鴉の様おかしきに打ちまぎれて、今までの苦しさ忘れつゝ、狂気めきし間二つ三つ試みしが『常夜の闇にて、汝は如何に呼ばれしや』とたづねし時、かれは只子バ、モア、（決して）と答へしのみ。この答の極めて無意味に、わが間にさへ叶はざりしかど、斯くあれはてし我が部屋の中に、たづね来て、パラスの半身像の上に止りしは、昔志より例しなき冥加なるべしと思はれぬ。褥ある椅子をパラスの前に押しやりて、わが身を天鵞絨（ビロード）の中に埋め、千万無量の考へに耽りつゝ、おそろ志く蒼白き前兆となれる太古の鴉が叫びしバ、モアの中に、如何なる意味の含まれ居るかを、考へそめし時、おそろ志き眼の光りは、直ちにわれを射て、胸を焼すやうにおぼえぬ。われは天鵞絨ある椅子に体をもたせ乍ら、尚深き考への淵にしづみ志が、燈火は最後の炎をあげて一際明るく天鵞絨の上を照志ぬ。されども、この美志くかどやける天鵞絨の上に、わが恋しきレノアは永劫無限の如き髪と、薔薇に似たる頬とを、押しつくるをなかるべし。

あたりの空気は一層□^{（不明）}かになり行きて、桂（肉桂）の香に似たる匂ひは、不意にわが鼻をうち志かと思はれぬ。われは不思議にたへかねて、おそろく、天女のふり撒きしものなるべしと思ひし時、鏗然（鏗は金属や石などのコーンと鳴る意）たる天女の足音は、絨毯（カーペット）の上にひびき亘りしやうなり。

あゝ不惑なる我が身よ、天の神はわれに天使を送りて、レノアをわするべき鎮痛剤を与へ玉へり。われはこの天薬を服志て、亡きレノアの事わすれ去るべきぞ。

われはかく叫びし後、又古き鴉にもいぶしき、疑問を与へぬ。

ギシッの地には、神のわれに与へ玉ひし鎮痛剤ありや、こひしきレノアを忘るべき鎮痛剤ありや、

子バ、モア、

かれは只この一語を繰りかへし志のみ、

かの遠きエデンの花園には、レノアを呼はれたる美しき乙女ありや、天使は今もなほ、うつくしく清く、気高く罪なき、レノアを抱きつゝありや。

子バ、モア、

われは憤然と志て席を蹴たてつゝ、殆と泣き出てん計りに叫へり。

鳥よ、悪魔よ。汝は今の一言を別れの志るしとして、我れを去れ。常夜の闇の暗き岸に還れ。わが部屋の上なる、半身像をされ。わが胸に差しこみし、汝の嘴を抜け。

ネバーモア

かれは尚青白きバラスの上に蹲りつ。悪魔の如き眼はきら／＼と輝きていましき影を床の上にうつせり。わが魂はかれが影に圧せられて、永劫無限、再びうかび出つる事なかるべ志
(エドカー、・ポーが作、ぜ、レーブンの心を取りて)
(一) 内は、引用者

ポーの「大がらす」の原文とつきくらべて読んでみたかぎりでは、「怪しき鴉」は逐語訳ではなく自由訳または縮訳とでもいえそうなもので、訳者は原文全体をちぎめて訳した上、詩文の語句をうまく利用し、あたかも創作詩のような文章をつづっている。

「ぜ、レーブンの心を取りて」の一文は、原作の気分または氣持をくんで文章を草したということか。

ところで明治二十二(一八八九)年から亡くなる大正五(一九一六)年までの二十七年間に、漱石がのこした俳句は約二六〇〇句あるのだが、このなかに下の句が「影法師」で終っているものが五首ある。たとえばつぎに引くものがそれである。

- 名月や故郷遠き影法師(明治28・11・3、正岡子規宛)
- 名月や丸きは僧の影法師(明治29・9・25、子規宛)
- うき除夜を壁に向へば影法師(明治31・1・6、子規宛)
- 霧黄なる市に動くや影法師(明治35・12・1、ロンドンで子規の訃に接し、高浜虚子に送った手紙のなかの句)

○ 只寒し封を開けば影法師、(明治38・12・24、鈴木三重吉宛)

ちなみに影法師とは、うつし絵やかげえ、または障子や地上にうつった人の影の意である。

(傍点引用者)

漱石が熊本に着任したのは明治二十九(一八九六)年四月十三日のことで、英国留学のために同地を去り東京へむかったのは同三十三(一九〇〇)年七月二十日である。⁽⁴⁾

かれはなぜ「影法師」にこだわり、くり返し用いたのか。

「怪しい鴉」の訳者「かげぼうし」と漱石の俳句のなかに出てくる「影法師」とのあいだに、なんらかの関連があるのだろうか。

一見したところ、両者のあいだになんの脈絡もないことは、はっきりしている。「怪しい鴉」の訳者は、あえて実名をかかげず、ただじぶんを「かげぼうし」になぞらえているにすぎない。

一方、「影法師」が登場する漱石の俳句は、いずれも晩秋から厳冬にかけて詠まれたもので、その点景は、明月の夜に黒く映った人影やくらく、わびしいロンドンの街中でくらす留学生のすがたなどであり、漱石はじぶんを影に見立てているのである。

かりに「怪しい鴉」の「かげぼうし」と漱石の「影法師」とのあいだに、なんらかの接点があるとすれば、影を擬人化し、じぶんをそれになぞらえていることであろうか。

訳者「かげぼうし」が「怪しい鴉」を発表した時期と漱石の「影法師」がすがたをみせる時期がおたがい近いことも、ポーと漱石とを結びつけている点と線のようにおもえるのである。

「怪しい鴉」の訳者「かげぼうし」は、じつは漱石その人であったと仮定すると、イギリス留学中に『龍南会雑誌』（明治34・3・22）に発表したことになるが、かれはロンドンから投稿したのであろうか。それとも出発する前、編集部員に原稿をあずけていったのであろうか。漱石のロンドン日記や書簡にもそのことにふれた箇所は見あたらない。五高時代の英語教師には、浅井栄熙・大浦壺・荻村錦太・中川久知（博物をかねる）・賀来能次郎（ドイツ語・地学・史学をかねる）・杉山岩三郎（数学をかねる）・篠本二郎（地学・鉱学をかねる）・ヘンリーファードル（英仏語をかねる）その他がいるが、このなかでポーに関心をもち、訳筆をじっさいとった者がいたとは考えにくい。

漱石は五高在職中、「人生」（明治29・10・24）「端艇部の大飛躍」（明治30・6・13）⁽⁶⁾「英国文人と新聞雑誌」（明治32・6・27）「古別離」（明治33・2・28）など四篇を『龍南会雑誌』に発表している。が、「怪しい鴉」は、かれの筆になるものではないかとおもえてしかたがない。

漱石旧蔵の二冊のポー文献から明らかにするのは、かれは散文では「リジニア」「黄金虫」「ヴァルドマール氏の病症の真相」などのほか、「ピンのなかの手記」⁽⁷⁾を読んでいたことである。

また韻文の代表作である「大がらす」をじっさい読むにいたったのは、恩師ケーベルに触発されたのかもかもしれない。

漱石は「大がらす」がかもし出している、幽玄神秘の世界に目をむける一方で散文のとりとめもない、でたらめ話に注意を惹かれている。かれはおもしろ本位で、ポーの作品をひろい読みはしたけれど、ポーを研究対象とする気はなかったようだ。

わたしは『龍南会雑誌』のバックナンバーのページをめくっていたときに、図らずも「怪しき鴉」を見つけたのだが、その訳筆をとった謎の人物にかぎらない興味をおぼえ今日にいたっている。

注

(1) 龍南会雑誌の巻頭論文(「人生」)を依頼したのは、小島武雄(明治三十一年卒業、のち山口高等学校教授、熊本市出身)であった。小島は五高に在学中、演説部員兼雑誌部委員であった(小山紘『五高その世界——旧制高校史発掘』西日本新聞社、昭和61・10)。

(2) 東北大学附属図書館に、「ケーベル文庫」(旧蔵書一九九九冊)がある。これは昭和十七年三月に、同図書館が受入れたものだが、このなかにはポーの独訳こそ見られぬが、英語版一冊とボードレーールの仏訳三冊が収めてある。ケーベルがもっていたポーの原書は、Prose Tales, W. an intro. by J.R. Lowell, London, Routledge, 1897である。同書の目次にみられる「黒猫」と「陥穽と振子」に、エンビツによる傍線がみられる。また仏訳三冊は、同じようなものである。

E. A. Poe : Aventures d'Arthur Gordon Pym, tr. de C. Baudelaire par Lévy Nouvelle éd. 1884.

” : Histoires extraordinaires, tr. de C. Baudelaire par Lévy 1883.

” : Nouvelles histoires extraordinaires, tr. de C. Baudelaire par Lévy 1883.

これらの仏訳本はいずれも日本で求めたものであり、エンビツによる書き込みがたくさん見られる。

(3) 漱石の旧蔵本 Poems of Edgar Allan Poe, with biographical sketch by N. H. Dole, George Routledge & Sons, London の七二頁に「大がらす」が収められている。

(4) 荒 正人『漱石研究年表』(集英社、昭和四十九年十月)を参照。

(5) 『五高五十年史』(第五高等学校、昭和十四年三月)を参照。

(6) 小山 紘『五高その世界——旧制高校史発掘』(西日本新聞社、昭和六十一年十月)、六七〜六八ページを参照。

(7) 漱石はまた明治三十八(一九〇五)年十一月ごろ、ポーの「ビンの中の手記」を読んでいたようで、「只今一寸ポーの短篇を読んで居た処左の文句あり……」と述べている(小石川区同心町に住む森巻吉宛書簡、明治38・11・29付)